

第81回 ムガル帝国

1 ムガル帝国の成立

- ・インドでは、() というイスラーム諸王朝が成立していた。
→16世紀初めには、アフガン系の() がインドを支配していた。

☆ () (ムガル朝) (1526~1858年)

都… () ※現在のインドの首都

◆ () (在位 1526~1530年)

- ・1507年、ティムール朝が崩壊した際、王族のバーブルはアフガニスタンのカーブルに拠点を置いた。
- 1526年にインドへ侵入し、パーニーパットの戦いでロディー朝を破って、ムガル帝国を建国した。



バーブル
ティムールの直系の子孫である。回想録の『バーブル=ナーマ』を著した。



アクバル
第3代皇帝。その治世は、49年に及んだ。側近が『アクバル=ナーマ』という記録を残している。

◆ () (在位 1556~1605年)

- ・ヒンドゥー教徒を懐柔するため、人頭税である() した。
→宗教の融和をはかり、ムガル帝国に安定をもたらした。
- ・() により、維持すべき騎兵・騎馬数と給与を定め、官位に応じてジャーギールという土地の徴税権を与えて組織化した。
- ・北インドに勢力を持っていた() とも和平を結んだ。
- ・都をデリーから() に遷した。

◆ ジャハーンギール (在位 1605~1627年)

- ・第4代皇帝で、アクバルの政策を継続した。

◆ () (在位 1628~1658年)

- ・愛する妻を偲んで、インド=イスラーム文化の傑作である、() を建設した。



第5代皇帝シャー=ジャハーンと妻ムムターズ=マハルの間には、妻が36歳で病死するまでに14人の子供があった。アウラングゼーブはそのひとりである。

ムムターズ=マハルとシャー=ジャハーン



タージ=マハル

シャー=ジャハーンが、愛妻の死を悼んで建設した。総大理石である。タージ=マハルとむかいあう形で、黒大理石の廟を建てる計画があったらしい。



アウラングゼーブ
第6代皇帝。ムガル帝国の分裂を早めたことは間違いない。目つきが悪い！

◆ () (在位 1658~1707年)

- ・彼の時代に、ムガル帝国の領土は最大となった。
- ・厳格なスンナ派で、() や他宗教の弾圧を行った。
→ニザーム王国やアワド王国の自立、ラージプートの反乱などが起こり、ムガル帝国の衰退が始まった。

2 ムガル帝国以外のインド諸国家

- ・南インドでは、14世紀から（ ）が栄えた。
→17世紀以降は（ ）が栄えた。



ティープー

マイソール王国の国王で、イギリス軍に抵抗した。入試には出ないが面白いキャラ。

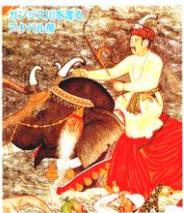
☆（ ）（1674～1818年）

- ・（ ）がインド中部のデカン地方に建国し、ヒンドゥー教を信仰した。
→衰退後は、諸侯の連合体であるマラーター同盟が、ムガル帝国に抵抗を続けた。

3 ムガル帝国期のインド社会

- ・ムガル帝国の時代、トルコやイランから入ったイスラーム文化と、インドの伝統文化が融合し、インド=イスラーム文化が誕生した。
- ・またイスラーム教に改宗するインド人も多かった。

- ・絵画では、トルコやイランの影響を受けた（ ）が作られた。
→写実的で宮廷や肖像画を多く描いた（ ）や、ヒンドゥー教の神話を題材にしたラージプート絵画が生まれた。



ムガル絵画

題材は、ガンジス川を渡るアクバル帝である。戦闘用の象部隊を率いている。アクバルの統治について叙述した、『アクバル=ナーマ』の挿絵として描かれた。



ラージプート絵画

西北インドのラージプートたちの宮廷で発達した。非常に色彩豊かな絵画である。ヒンドゥー教の神話を題材にし、『ラーマーヤナ』などが描かれた。



ナーナク

頭にターバンを巻き、髭を生やしている。ヒンドゥー教とイスラーム教の両方の影響が伺える。インドのシン元首相もシク教徒であった。聖地はアムリットサルにある黄金寺院。

- ・カビールは、ヒンドゥー教のバクティ信仰とイスラーム教神秘主義の融合を試みた。
→その影響を受けた（ ）が（ ）を創始し、カースト制度や偶像崇拜を否定した。
→ムガル帝国に対して反乱し、西北部のパンジャーブ地方にシク王国を建国した。
- ・北インドのヒンディー語に、ムガル帝国の公用語である（ ）が混ざり、（ ）が誕生した。
- ・インド各地では、（ ）、インディゴ（藍）、砂糖など商品作物が生産され、輸出された。ムガル帝国が衰退すると、ヨーロッパ諸国の進出も盛んになった。

17世紀後半(イスラーム3帝国の鼎立)

